

京都大學經濟學會

經濟論叢

第六十七卷 第一號

經濟社會學者としてのマックス・ウェーバー……………青山秀夫

明治後期の農村經濟……………堀江保藏

山本二三丸著「恐慌論研究」……………恐慌論研究班

昭和二十六年一月

評書

山本二三丸著 「恐慌論研究」

恐慌論研究班

一序

今日、再生産論—實現理論(資本論第一卷第三節)が、恐慌を説明するための最も主要な武器の一つであることは、誰しも異存のないところであるが、それにも拘らず實際にこの武器を利用して恐慌を説明した人々が正しい恐慌理論を樹立することに成功しているかといえ、必ずしもそうとはいえないのは、奇異な感じをいだかせる程である。ツガン、ヒルフアデーイングの不比例説はいうに及ばず、ブハーリン、ローザにしても、直接間接再生産論に關説せざるはない。またこれら諸説の誤謬を既に批判すみのものとして受入れている我國の理論家達が自ら再生産論を使つて恐慌論を展開する場合、多かれ少かれ同じような誤謬を繰返している有様は一層奇妙である。従つて今日我々が恐慌の基礎理論を従来の諸理論の批判の上に立つて、更に發展せしめようとする場合「恐慌理論における再生産論の地位」、若しくは「再生産表式と恐慌との關連について」、根本的に再検討することから出發しなければ、一步も前進し得ない状況にあ

山本二三丸著「恐慌論研究」

ることは容易に理解し得るであらう。

我々がここに紹介せんとする山本二三丸氏の近著「恐慌論研究」は、まさにこの點に着目され、従来の諸理論をこの觀點から再検討され、その批判を通じて、氏自身の恐慌論展開のための地均しをされようとしたものである。従つて本書において批判の祖上にのぼる諸々の恐慌論は、その基調を再生産論におくものに限られ、終始それらとの論争のかたちをとつて敘述が進められる。まず第一章においては「再生産表式と恐慌」という表題の下に山田盛太郎氏の名著「再生産過程分析序論」が批判の対象となる。山田氏の理論を先ず最初に取上げた理由として、著者自身次のように述べている。「われわれは、恐慌理論そのものについての具體的な検討に入るにさき立つて、再生産論の立場から恐慌をどのように見るかということをおろかじめ考察しておくことが適當であり、かつ必要であるというように考えるのである。つまり、それは再生産論から見た恐慌論の地位という問題である。この問題を明らかにすることは、それ自體當面の問題にとつて重要な意義をもっているばかりでなく、またこれによつて、恐慌理論についての具體的考察にさいしての一般的な見透しがあらかじめ與えられるのである。ここでわたしが念頭においているのは、山田盛太郎氏の名著「再生産過程分析序論」にはかならない。「恐慌論研究」一八頁以下頁數のみを示す。

第六十七卷

三九

第一號

三九

のは本書より引用」と。この一句の中には單に第一章のみならず本書全體に對する著者の構想があまりとこなく述べられてゐると考へてよいであらう。すなわち、再生産論の立場から恐慌をどうみるかは、再生産論自體をどのように把握してゐるかによつて決定される問題であり、従つて諸理論における再生産論把握の正否を検討することが、基礎とならねばならない。それはまた具體的に恐慌論を展開する場合に果して正しい出發點に立つてゐるか否かを明かにすることにもなるわけである。従つて本書において諸理論を批判するにあたり、著者はその各々について、まずその再生産論を検討してその特質をつかみ出し、次にかつて特徴づけられた再生産論を基礎にして恐慌論を説明しようとする場合、そこに如何なる缺陷が暴露されるかというように批判を進めてゐるのである。

すなわち、第一章においては「第一節、恐慌の可能性」「第二節『條件』と一層發展せる恐慌の可能性」において、山田氏の再生産論を詳細に吟味し、「第三節、所謂狹隘な『消費』限界と恐慌。内在的矛盾」、「第四節、過小消費の誤謬」において山田氏の「再生産論と内在的矛盾の連繫」を批判し、「第五節要約」において、再生産論及び再生産論「内在的矛盾」基本的矛盾「恐慌の連繫の問題に對して著者自身の積極的見解を簡單に或いは暗示的に述べてゐる。

次に「第二章、再生産論と恐慌論」「第一節、再生産論の構

成」において、山田氏前掲著及び飯田實一氏の「再生産論」における所説の批判を通じて、資本論における再生産論の位置づけを行い、間接に再生産論の性質を明かにし「第二節、再生産論と恐慌論」において飯田氏の見解を批判してゐる。「第三章再生産論を基調とする恐慌理論」では、まず「第一節、蓄積と恐慌」において相原茂氏（蓄積と恐慌）を、「第二節、價值實現と恐慌」において川崎己三郎氏（恐慌）を、「第三節、消費力減少と恐慌」において宮川實氏（恐慌分析講座その他）を夫々同様の順序で批判し、前後の「第四節『均衡條件』と恐慌」において吉田義三氏（景氣變動論その他）を「一、理論把握の問題」「二、均衡分析としての再生産論」「三、不均衡過程の分析としての恐慌」景氣論」の三項目にわけて詳細に批判し、その所説の外見的特徴さにもかかわらず、再生産論の誤つた把握が如何に恐慌論の極端な俗流化をもたらすかを遺憾なく暴露してゐる。

以上の本書の内容を論點に即してまとめあげるならば以下の三つとなるであらう。

第一に、著者の批判は、これら諸恐慌理論の基調となつてゐる再生産論が例外なく、均衡的に至曲して理解されておる點に向けられ、著者の再生産の條件「法則」といふ見解と鋭く對立せしめられてゐること。

第二に、それにも拘らず法則の内容そのものに關する著者自身の説明は極めて簡單で暗示的である。

第三に、均衡論的に歪曲された再生産論を資本主義の内在的矛盾(生産と消費の矛盾)に連繫せしめようとする場合、多かれ少かれ内在的矛盾による均衡条件の擾乱という、通俗的見解におちいらざるをえないことが暴露されていることである。

従つて以下本書の内容を詳細に紹介するにあつて我々は、「再生産論と均衡条件」「再生産の条件」法則」「再生産の条件と内在的矛盾」の三項目に別つて敘述を進め、最後に結論として若干我々の見解を述べることにする。

二 再生産論と均衡条件

著者は、まず、山田盛太郎氏によつて再生産の条件が如何に把握されているか、ということの批判から始めている。山田氏は再生産表式におきて

$$I 1000v + 1000m = II 2000c$$

$$II b) 100v + 60m (\text{生活必需品用}) = II a) 160m (\text{奢侈品用})$$

の二者は、資本の直接的生産過程と流通過程との統一の成否如何がかかつている決定的条件をなしているときれ、さらにローザの所謂『個々の齒車の特殊な咬み合せ』を媒介するものとして『二連の貨幣回流』を以つて『再生産の条件』と規定されてゐる。(山田氏序論 p. 四一六・山田氏 p. 二八一九)

しかしながら、『二連の貨幣回流』は恐慌の可能性の契機として必要であつても、『再生産の条件』に加えることは正しくな

いという山田氏の指摘はいうまでもなく正しいが、問題は山田氏の所謂『決定的条件』にある。氏によれば、「この条件が確保せられぬ限り、單純再生産の圓滑な進行は不可能であり」(序論 p. 四)それは『價值補填』素材補填の決定的条件』をなす。すなはち山田氏は『決定的条件』を「もしそれがかなえられなければ再生産過程が破壊される、重大な支障をきたす」条件としように把える。このような理解の仕方は正しいか。

「W1……W2なる運動にあつては、まさに、この總生産物 W の各價值部分はどうなるかが證明されねばならぬ」といふことから、社會的再生産の諸条件が認識されるのである」(M. E. I. Das Kapital II, S. 395—S. 396)従つてわれわれが社會的總資本の再生産と流通を圖式的に表現せんとする場合、必然的に與えられる条件は二部門分割・價值構成(C・V・M)という再生産の基礎的範疇の性質から生じ、その必然的結果として、マルクスのいうところの三大支點に集約されるのである。(cf. Das Kapital II, S. 400) 従つて、山田氏が条件を「決定的条件の意味に解すべきものではなくて、むしろ反對に、總生産物の各價值部分がどうなるか、價值補填ならびに資料補填がいかに行はれるかという意味において、いかにえれば法則を意味するものとして、理解されるべきである」(傍點筆者山田氏 p. 四〇)と述べておられるのは正しく、きはめて卓見といはねばならない。しかしこの山田氏の提言が正しければ正しい程、山田氏の再生産論理解の限界は、い

よい明瞭となるであろう。そしてこの限界は山田氏が「再生産の條件と所謂狭隘な『消費』限界との連繫」について語るときにあらわに眼に映ずるであらう。山田氏が再生産論を以つて『資本の運動形態究明の問題』『一般の抽象的規定の問題』とされるのは、山本氏と共にわれわれもまたこれを正しいものと認めねばならない。しかし山田氏が、可變資本の運動の『絶対要件』として『労働賃銀總額』と『労働者たちの消費資料の價值』とが相等しいことの『要請』を主張されるとき、それは山本氏の指摘するように、『労働賃銀總額』という概念をこの場合導入することであり、労働力の價值と價格との乖離を、總じて價格變動の要因を、問題の考察に引き入れることになる。(山本氏P四五)従つてそれは先の再生産論の抽象性に關する山田氏の正しい規定と明白に矛盾するものといわねばならないにも拘らず山田氏がこのような要請をもち出されるのは、再生産の條件Ⅱ決定的條件にまさに照應するからに他ならない。山本氏は『條件』と恐慌について『決定的條件』であれば、恐慌は『條件』の阻害の結果としてあらわれる」と指摘されるのであるが(山本氏P四四)まさに、山田氏において、そのようにあらわれる。即ち、勞賃の價值以下への低下による『絶対要件』の破壊Ⅱ所謂狭隘な『消費』限界は後に見る如く、間接的であれ、『決定的條件』の破壊を導くものとされ、恐慌を決定するに到るものとされている。かくて山本氏の言う如く、『決定的條件』が恐慌

を決定する『條件』となりうるであらうことは、疑いをいれなるところであらう。(山本氏P二〇六)或いはまた「社會的再生産の條件を、『圓滑な』『理想的な』再生産の進行の『決定的條件』としてとらえるときは、再生産の法則は逆に『均衡條件』に化せしめられ、必然的に、恐慌のみならず、社會的再生産についてもその『均衡論』的理解に陥る恐れがある」ことも必然である。

次にわれわれは、『マルクスの再生産』は、「商品が價值通り、賣れるためには、どういふ條件が必要であるかを明かにする」理論であるとする、川崎己三郎氏の見解を検討しなくてはならぬ。川崎氏は『條件』について次の如く言う、「つまり、商品が價值(または生産價格)で賣れるための條件は、社會の總労働が、それぞれの商品に對する社會的欲望をみたくすに過不足のないように、均衡がとれて、それぞれの商品の生産部門に配分されるということである。これはマルクスの言葉をかりていえば、『自然法則』であつて『誰でも知つてゐる』ことである」(川崎氏・恐慌P二四)。これは五十年前、レーニンによつて批判されたP・B・ストルツェの均衡的配分の理論と同じものであることは、誰でも容易に氣付き得る。これが川崎氏によつて如何に再生産と關聯せしめられるかを見よう。社會的欲望を規定するものは、生産それ自體であり、生産は同時に消費であるから、生産の繼續Ⅱ再生産は如何にして可能かの問題として、

條件はつきとめられると川崎氏は推論する。だからここにおいても再生産の條件は、價值實現の『決定的條件』に轉化していることは疑いえない。従つて、問題を、『價值實現の條件』と恐慌との關聯に移した場合、川崎氏の謬見は次の矛盾となつてあらわれる。川崎氏が均衡的配分の理論を主張し、マルタスに従つて、「恐慌は、つねに、現在する諸矛盾の一時的な暴力的解決にすぎず、覺醒された均衡を瞬間的に再建する暴力的な爆發にすぎない」(Das Kapital III, S. 277)とする限り、價值實現は、恐慌によつてこそ達せられる。山本氏の表現に従えば「恐慌は、資本家にとつてはまさに救いの神とも云うべきものである」。他方に於て、川崎氏は、勞賃の價值以下への切下、蓄積の増大による資本家の個人的消費の制限によつて、つまり生産と消費の矛盾によつて價值實現の條件が破壊されると主張する。ここで川崎氏は、恐慌は均衡の破壊か、恢復かの分岐點に立つにもかかわらず、『究極において』恐慌を均衡破壊に結びつけられたのは、はじめの『價值實現の條件』『均衡的配分の理論』の當然の歸結とも云うべきものである(山本氏 P. 二三四)。

次に山本氏は「再生産論を基調とする恐慌理論の中で、最も精緻な、かつ體系的な形をととのえている」吉田義三氏の理論をとりあげ以下の如く批判する。吉田氏によつては資本論は不完全であり、それは既に古くさく、近代經濟學『俗流經濟學』による補充が必要であり、これら二つの經濟學の統合によつて理

論のより一層の具體化は期せられるべきものである。氏はまず自らの景氣變動論的方法論的見解を述べ、「この(景氣變動論)問題の研究にあつては最早抽象的な價值論の枠内にあるいは、價值法則乃至一般的利潤率の支配という、資本制生産の一般的均衡状態に限定された抽象の領域内に止まりえないということである。」とされる。ここに氏の科學的理論に關する理解の一切がつくされているのであるが、この様な價值論にもとづいて再生産論が把握されている場合、それは當然社會的總資本の再生産過程として「經濟循環の均衡分析の理論」『再生産の均衡條件の檢出のための理論』とならねばならないであらう。こうして吉田氏によつて景氣變動論の中心問題は如何にして『不均等的發展』から『不均衡』を導くかという點におかれざるを得ないのであるが、この不均等發展なるものが、氏自らいわれるように生産と消費の矛盾を別の言葉で云いあらわしたものにすぎないならば、このような問題提起が何を意味するか、我々にはもはや明らかである。均衡條件論者の落着つくべき點に氏もまた落着かれたことを意味するにすぎない。ただ氏の特徴は公然と均衡論をもち出されることであり、それだけ理論の俗流化を徹底されたことにあるといえよう。

三 再生産の條件Ⅱ法則

山本氏が再生産論把握において再生産の條件Ⅱ法則として認

識することの決定的重要性を指摘せられてゐることは、既に見た如くであるが、しからば氏がこの再生産の條件に法則をどのように理解されてゐるかを、次に考察しよう。先に述べたように著者は山田氏の所謂決定的條件に對し多分の疑義を提出され『條件』について詳細な批判を展開されたのち、所謂「決定的條件」はまさに、再生産論の均衡論的理解によつてもたらされたものであることを結論され、再生産の條件はそのように把握さるべきでなく、法則として把握されねばならぬことを力説された。すなわち氏によれば再生産論の課題は社會的總資本の再生産と流通從つて「W」の各個の構成部分の價值に並びに素材補填の立場から「生産において消耗された資本はその價值から見てもいかにして年々の生産物から填補されるか、またこの填補の運動は資本家による剩餘價値の消費および勞賃の消費と如何に絡みあつてゐるか。」(九二頁)を明らかにするにある。「それゆゑ、社會的再生産の條件とは、まさにこの社會的總資本の再生産と流通がいかに行われるかというところ、そのこと自體でなければならぬ。いかえれば社會的總資本の再生産と流通の條件とは、その法則を意味するものである。」(資本論 第二卷第三篇、すなわちいわゆる再生産論が明らかにしてゐるのは、まさにこの社會的再生産の條件とその法則にほかならぬのである。)(九三頁)と要論してゐる。

更に「科學的經濟理論における法則とは何か? それは、現

實の經濟諸現象を、終局において支配するもの、それらの不斷の諸變動がたえずこれに落ちつこうとしてはそのから反撥する中心的、平均的規準、をあらわしてゐる。……實に、經濟法則の「抽象性」とは、その法則たるゆゑんを示すものにほかならない。(九六頁)というように法則の意味を一般的に規定されたのち、再生産の條件に法則の具體的内容を展開される。

山本氏は、社會的再生産の諸條件に諸法則を把握するにあつては、物材規定による二部門分割と各部門生産物の三價值構成部分とを、決定的意義を有する、わば理論的、前提(勞賃)として、マルクスの所謂「最初から與えられてゐる」『三大支點』——(一)第一部門における $V+M$ との填補、(二)兩部門間の轉讓、

I ($V+M$) 對 II C、および(三)第一部門内部におけるCの填補、——即ち最も本質的な支點を明確に把握し、さらにそこで抽象されていた「貨幣回流」の要因を分析することによつて、「再生産の諸條件」諸法則が全き姿において把握される。(九五頁)と結論し、「再生産の諸條件」諸法則をこの支點のみに限定される。ここに我々は著者の「恐慌論研究」をつらぬく樞軸をみるのであるが、それが山田氏その他の「再生産論」批判において示めた威力は既に我々の認めざるを得なかつたところであるにも拘らず、一步進んでこれで充分であるかと問われるならば、我々は必ずしも容易に肯定しがたいものを感じるのである。

再生産の諸條件に諸法則として把握する場合、われわれはこ

れが資本主義の運動法則を十全にあらわすものではなく、其の一部分、一側面の展開であり、資本論の敘述展開に於ける「抽象から具體」への一段階、即ち社會的總資本が個別的資本の回轉を自己の契機としながら、生産過程と流通過程の統一として把握されると共に、第三卷の總過程への「橋渡し」をなすものとしてとらえねばならぬ。かかるものとして、法則そのものが質的規定をもつものであるという點をはきつりと把握する必要がありと考ふる。

氏が決定的意義を有するとなす二部門分割と三價值構成部分は、社會的再生産の三大支點が進行するための基本的命題であるが、レオンは社會的總生産物の價值並びに物材形態えの分割を、社會的總資本の再生産の本質そのものから出てくるものとなし、次のように云う。「個別的資本の生産及び再生産の分析は、全然生産物の現物形態に關する問題を度外視して、かかる分類なしにやることが出来たのに、現在社會的資本の再生産を分析するに當つては、何故に生産物の現物形態に従つての如きの分類が必要であるか、の問題が出て来る。……従つてここには『價値の填補のみならず、生産物の現物形態の填補をも』(Soforts)『資本論』二卷三八九頁)我々は持つて居るため、社會經濟過程に於て全然異つた役割を演ずるところの諸生産物を區別することが無條件に必要である。」(N.レーン著市場の理論河野謙白譯社版、一五—一六頁)かくてこの點を明確に認識することによ

つて個別的諸資本の運動法則から社會的總資本の運動法則えの質的飛躍發展の必然性が把握され、この基本的命題の上に、三大支點が進行するのであり三支點のもつ意味が浮彫にされてくるのである。社會的總資本の運動法則把握においてこの基礎範疇(二部門分割、價值構成)が必然的なものとして、すえられねばならないということは、これらの諸範疇自體資本家的生産方法に固有な特質、すなわち「生産のための生産」が社會的規模において、自らを展開する必然的基礎であるからに他ならぬ。そしてこの展開を媒介するものが三大支點に他ならないのである。従つて再生産の條件—法則たる把握にはこのように資本主義の矛盾の運動形態たる意味がふくまれてくるのである。従つて再生産の條件—法則として三大支點を指摘するだけでは充分ではなく、その質的意味を正しく理解しなければならぬ、三大支點がかかるものであつて始めて再生産表式が、生産と消費の矛盾を反映しているというこもいいうるのではないであらうか。

四 再生産の條件と内在的矛盾

恐慌説明の基調に再生産論をおく人々が、期せずして再生産の條件を均衡條件として把握していることを鋭く指摘した山本氏は、次にこれらの人々が具體的に再生産論を恐慌論に連繫せしめる場合、必然的に如何なる缺陷を暴露するかを詳細に我々の前に示めされる。

再生産の諸條件が資本制生産が支障なく、圓滑に行われるための均衡條件（若しくは決定的條件）であるならば、「資本制生産の諸矛盾の暴力的な爆發」である恐慌は、當然山本氏の指摘されるように「諸條件」の阻害の結果としてあらわれねばならないであろう。従つてまた恐慌の可能性を現實性に轉化せしめる「原因」もかかる均衡條件を破壊または擾亂する「原因」としてあらわれざるを得ないであろう。

さてそれでは、均衡論者達はこの擾亂の原因をどこに求めてゐるか。

相原氏によれば、蓄積の進行に伴つて生産諸部門間の不均等と、生産と個人的消費の不均衡が擴大され「その結果、社會的再生産の圓滑なる進行を保證するところの等式は……今や現實に不等式に一變する。」（一八四）。

次に川崎氏は、生産の無政府性のため生産諸部門間の比例關係は不斷に破壊され、他面生産のための生産に狂奔する資本家的生産は大量の消費力を價值以下にさへ低下せしめ、かくて價値實現の條件を破壊するとされる。（二〇六頁参照）

宮川氏によれば、「再生産がどこほりなく、圓滑に行われる……條件」を不可避的に破壊する原因は、資本の蓄積が進行するにつれて、社會の消費力が、第二部門で生産される價値の總額に較べて相對的に減少するところにある。（二二八―九頁）

また吉田氏にとっては、恐慌—恐慌論の問題の焦點—は「生

産と消費との間の矛盾が如何にして再生産過程のどのような均衡となつて現われてくるかというところにある。」（二七七頁）

見られるとおり、これらの諸氏にあつては、夫々多少のニエアンスをもつとはいへ、生産と消費の矛盾が均衡條件擾亂の直接の原因と考えられている點では例外なく一致している。このような考え方は正しいであろうか。たとへ一度でもレーニンの「市場理論」に眼を通じたことのある人なら即座に否と答へざるを得ないであろう。レーニンはそこで、支障なく發展する資本主義の下でも、生産と消費の矛盾は存し得るし絶対に排除され得るものではない、それどころか、擴大されさえもすることを明確に認めており、従つてまた生産と消費の矛盾から恐慌を導き出す理論の誤謬をも確認しているのである。レーニンに忠實な人ならばこれを認めないわけにはゆかない。山本氏もその一人としてさきの諸理論の誤謬を斷言される。

このように一應誰にでも容易に氣付かれる筈の誤謬が何故にかくも多くの人々によつて繰返し犯されるのであるか。このような事態こそ、再生産の條件を均衡條件として把握する偏向が如何に根強いものであるかを示す以外の何ものでもない。生産論をブルジョア均衡論的に解釋される吉田義三氏が勢の赴くところ遂にマルクス・レーニンの實現理論をもつて恐慌論を展開するに不充分であると宣言される如きは別問題とするも、マルクス・レーニンの學說に飽く迄忠實であろうとしながら他方

再生産の條件を均衡條件として固執することの故に、「生産と消費の矛盾」と「再生産條件の擾亂」とを結びつけようとする努力を執拗に繰返へされる典型的な例を我々は山田氏に見ることが出来る。以下山田氏の恐慌論を稍詳しく追求することによつてその事を明かにしよう。(以下再生産過程表式分析論論六四—八八頁が取扱われ)

山田氏は單純再生産の表式の『一般的運動』を分析されてのち次いで『表式と條件』の相互關係檢討を通じて『表式の性質』を更に立入つて明らかにしようとする。そして『表式と條件』の關係を、第一、條件と一層發展せる恐慌の可能性との連繫、第二、條件と狹隘な消費限界との連繫、の二問題に限定して檢討される。第一においては『表式と條件』は次の如き關係において示めされる。恐慌の抽象的可能性は、直接的生産過程と流通過程との對立を包含する再生産過程——再生産表式に包括されるもの——において、一層發展せる恐慌の可能性として再現するのであるが、その際所謂『決定的條件』の齒車の喰ひ合せの進行が、貨幣流通—回流を通過せねばならぬ必然性こそ、一層發展せる恐慌の可能性の成立する契機であるとされることによつて、表式における決定的條件のもつ意義が示められるのである。ここですでに後段總生産物8000に對する1500Vのもつ意義若くは $V = (A_1 + B_1) + (V_1 + B_1V)$ の表式に對する關係が準備されているものといえる。さらに、恐慌はその本來の形態におい

ては必ず再生産の諸條件即ち一層發展せる恐慌の可能性を通じてのみ現出するものとされることによつて、『決定的條件』の意義はいよいよその重みを加えてくるわけである。

このように表式と條件との一般的關係を前提して問題はその二に移る。先ず可變資本—労働賃銀の運動の三條の軌道とその『絶対條件』——労働者たちに支拂われ、労働賃銀の總額が労働者達の消費資料の價值に相等しいこととの『要請』——がしめされ、さらに要請は齒車の喰ひ合せの條件及び貨幣流通—回流の條件が、可變資本—労働賃銀の運動の際に發現した所の特殊の一形態とされる。ここに決定的條件が若干形を變えて、あらわれていることは明かであろう。しかるにこの要請は搾取關係を直接的に反映するが故に、重要な意味をもつ。何となれば資本主義に内在するところの諸傾向は $V = (V_1 + B_1) + (V_2 + B_2V)$ (労働賃銀の無條件消費限界)を必然化し、要請の破壊をもたらさざるを得ないからである。ここに我々は所謂狹隘な消費限界が——要請の破壊、決定的條件の破壊のつながりを通じて——表式との關係においてもつところの意味の重さを知るべきである。またことに山田氏のいわれる如くまさに「狹隘な消費限界」と恐慌との連繫は茲で正當に把握されねばならぬ。かくて以下においてこの連繫は更に立入つて攻究されるわけであるが、これまで、このところで既に要請は、従つてまた狹隘な消費限界は、表式に對し、また一層擴大された恐慌の可能性に對し、決定的な意味

をもつものとしてその位置を確立されていることを見落してはならない。伏線は既に充分に引かれていたのである。

さて山田氏は再生産の條件を決定的条件と解する以上、條件攪亂の原因を生産と消費の矛盾に求めざるを得ないし、また現に労働者階級の所謂狭隘な『消費』限界が恐慌の問題と一定の（しかも決定的）連繋に立たせしめられているのであるが、他面側限な氏がレーニンによつて峻別されたマルクスの見地と過小消費説との差違を見逃す筈はなく、ここに「狭隘なる消費限界から直ちに恐慌を説明しようとするのは又誤謬であり、従つてこの狭隘な『消費』限界と恐慌との連繋を一層立ち入つて規定することが必要となる」とされ極めて慎重なる態度をとられる。そしてこの問題を（一）、資本家的生産様式に内在する矛盾と狭隘な消費限界との連繋、（二）、マルクス恐慌理論と過小消費説との比較の二點から考察される。（一）において山田氏はマルクスその他から多數の引用を試み、氏の所謂狭隘な消費限界が生産を無制限的に發達せしめようとする資本家的生産様式に對する一制限であることを確認されるわけであるが、これらのマルクスその他からの諸引用においては、狭隘なる消費とは生産の無制限の擴大に對して相對的に狭隘となる大衆の消費力の謂いであり、このような消費制限こそ資本家的生産の一制限であると考へられていたのである。山田氏の所謂労働力の價值以下への低下の意味における狭隘なる消費制限とは全くその意味を異にする。

山本氏が指摘されるとおり、この點に關する山田氏の誤謬はまことに重大であり、氏がブハーリン的均衡論え著しく接近していることを明瞭に示している。しかし我々は茲で山田氏が敢えて「内在的矛盾と、狭隘な限界との連繋」を特別に問題とされる積極的な意味を見落してはならぬ。先に労働力の價值以下への低下としてのみ規定された所謂狭隘な消費限界と恐慌との一定の關連、及びそれを直ちに恐慌と連繋せしめ得ないことが指摘されたが、今や狭隘な消費限界は資本家的生産の一制限として、現實的恐慌の終局的根據の一要素として、資本家的生産總體との關連において、より一層深刻にとらえられている。従つてこの消費限界は正統なマルクスの見地においても『恐慌の基礎の一要素・一誘因』をたらざるを得ないことは、今や山田氏にとつては自明である。だがマルクスの見地からはこれをもつて直ちに恐慌を説明することは許されない。ここにおいて山本氏のいわれるように、山田氏による「マルクスの見地と過小消費説との差違」は、まさに「直ちに」にであるか、そうでないかにかかつて來るのである。「第二、マルクスの見地と過小消費説の誤謬」において、この「直ちに」の意味するところが、具體的に検討される。山田氏にとつては狭隘な消費限界を「直ちに」ではなく、恐慌論と間接的に結びつける環を見付け出すことがここでの當面の仕事となるのであるが、それによつて始めて、「マルクスの見地」の正しきは十全に示めされるわけである。

氏はこの一環、しかも決定的な一環を再生産論に求められ、先ずマルクス・レーニンからの引用によつて狭隘な消費限界の問題が再生産論に包括されうものとし、そこから直ちに再生産表式にその『包括』關係を求められるのであるが、マルクス・レーニンは山田氏の引用された箇所において果してこのことを承認したのであるうか。山本氏はそれを否定され、むしろそれは消費制限と恐慌論とを結びつけるために再生産論をもち出すことの馬鹿げなことを——すなわち消費制限は再生産の進行をさまたげないことを——證明しているのであり、山田氏の意圖するところと正に反對のことを云つていたのであるとされる。この點山本氏の批判は確かに、正しいのであるが、しかし山田氏自身にとつてはもともとこのような意味での「生産と消費の矛盾」と再生産論との關係は問題となり得なかつたことに注意しなければならぬ、というのは既に狭隘な消費限界と労働力の價值以下への低下との混同に見られる如く、狭隘な消費限界は均衡攪亂の原因としてのみ問題とされており、このことに對する疑問は最初から山田氏の念頭になかつたといつても恐らくさしつかえない。山田氏が「狭隘な消費限界の問題は、再生産論に包括せられる」といふ、また「消費限界の問題は再生産を解明することになしには解明し難い」とされる場合に、氏が如何なることをここに求められたかは、むしろすぐつぎに所謂包括關係が、總生産物9000に對する1500Vの關係として示めさ

れていることのうち明かにあらわれている。これは既に述べたように「表式と條件」の相互依存關係の特殊形態にすぎず、すなわち1500Vにおける條件阻害は必然的に9000全體の阻害の問題たらざるを得ないというような依存關係以外の何ものでもない、従つて『包括』の問題も、實は、この關係を正當ずけんがためのものでしかなかつたのである。

かくていよいよ過小消費説から區別された、「マルクスの見地」による恐慌論が展開される。すなわち「過小消費説においては、恐慌の問題がVの1500V文けの問題に押し込められている」のに對し、マルクスの見地における「恐慌の問題は……生産物總計9000として總括せられている所の資本家的生産の全機構震撼の問題として把握せられている。」すなわちこの見地に於いては、「資本家的生産の全機構震撼が（換言すれば生産の社會的性質と領有の私的性質との間の矛盾が）、社會の總生産物合計9000の價值補填、素材補填の過程（即ち直接的生産過程と流通過程との統一）對立たる所の總流通（總再生産の過程）に於ける『一層發展せる恐慌の可能性』を通じて、強力的に爆發するものとして、恐慌を把握している。」と。

この恐慌規定において、先の「直ちに」の問題はどうなつたのであらうか。「一見消え去つて跡かたもないようであるが、よく見れば「直ちに」ではなく、「間接」に狭隘な消費限界が連繫せしめられる手掛りは與えられている。山田氏が「一層發展せ

る恐慌の可能性を通じて」といわれるとき、この可能性とそれの決定的契機たる所謂決定的條件との關係を想い浮べるならばこの可能性が1500Vと3000の所謂『包括』關係を通じて、狹隘な消費限界に連繫せしめられることは以上の論述から容易に看取出来るであらう。かくて山田氏におけるマルクスの見地と過小消費との區別はまさに山本氏の指摘されるように、「間接的」と「直接的」の言葉につきるものといわねばならない。

以上我々は、山本氏の山田氏に對する批判に依據しつつ若干觀點を變えて、山田氏の恐慌理論を出来るだけ内面的に跡づけしてみたのであるが、それから得られる結論は山田氏の再生産論理解に深く喰い込んでゐる均衡論的傾向が、恐慌論においても山田氏をして遂にマルクス・レーニンの正しい理解をさまたげ氏が正しい軌道を踏みはずまいと努力されればされる程、いよいよその均衡論的傾向の根強さと、擾亂の原因としての内在的矛盾を固執する際の頑固さを露呈するにすぎなかつたということである。

五 結 論

かくてわれわれは次の如くいえるであらう。氏の本書に於ける功績は氏が再生産論實現理論を均衡論的解釋の偏向から救つたことであり、したがつてエセ科學理論といわゆる折衷論（吉田義三氏及びその師流に最も典型的に現われている）による歪曲からマ

ルクス再生産論實現理論を護つたということである。が更につき進んで再生産論實現理論が恐慌といかなる關係乃至連繫をもつてゐるかについては、著者の積極的見解は、甚だ曖昧であり且疑問とすべき點も少くない。氏の恐慌と再生産論實現理論との關係は次の如く要約されるであらう。

- (一) 再生産論實現理論が示す法則そのものからは恐慌の原因は説明出来ない。
- (二) A 再生産論實現理論は基本的矛盾との連繫を通じて恐慌と連繫されねばならない。
- (二) B 再生産論實現理論と基本的矛盾との連繫は、基本的矛盾が再生産論實現理論に於いて、「内在的矛盾」という形でのみあらわれている。
- (二) C 「内在的矛盾」によつては恐慌は説明し得ない。
- (一) 及び(二) A、B、Cの要約からわれわれは次の如き結論を導き出すことが出来る。

- (三) 再生産論實現理論からは直接—法則そのものから—にせよ、間接—基本的矛盾と内在的矛盾との連繫を通じて—にせよ恐慌は説明し得ない。

この點について氏は「再生産論實現理論をもつて恐慌の重要部分を構成することは重大な問題が生ずる。」(二〇九頁)といひ、又「再生産表式と恐慌との關係を正しく把握することが至難であるばかりでなく、そこに幾多の重大な問題が潜んでい

る。(社會科學第一號一〇九頁) というように問題の慎重な取扱いはしておられるが、氏の結論は(三)の論理にならざるを得ないであらう。だが我々はこれについて今少し立入つた検討を加える必要がありそうである。今検討の必要上(二)の論理からはじめてみる。

(二)A 再生産論||實現理論は基本的矛盾との連繫を通じて恐慌と連繫されねばならない。このことについてはわれわれは全然異議がない。何となれば、恐慌という現象は資本制生産の外的な偶然的な經濟諸現象の中にその基本的原因を求められるべきではなく、資本制生産そのものの根本的な矛盾、即ち基本的矛盾の中に求められるべきものであるからだ。だからまたわれわれが恐慌を資本論に述べられた諸理論によつて説明しようとする場合、必ず基本的矛盾とそれらとの關聯を忘れないようにしなければならぬ。しかしそのことは同時に基本的矛盾が、資本論の論理的發展―抽象より具體への辯證法的发展―とともに、いかに自己を展開してゆくかを、正しく把握するということでもあらねばならぬ。すなはち資本主義の諸法則が常に基本的矛盾の自己展開として、それとの内的連繫において把握されねばならない。このことなしには再生産論と基本的矛盾の連繫も遂に正しく把握されないであらう。

(二)B 基本的矛盾が再生産論||實現理論に於いて「内在的矛盾」という形のみあらわれている。これに關しては内在的矛

盾という形でのみあらわれるということについては疑義があるが(これについては後述する)こののみをぬいて二方面から考察して見よう。即ち基本的矛盾と内在的矛盾との關係、次に再生産論||實現理論に於いては兩者の關係はいかなる形であらわれているか、ということ。

基本的矛盾はエンゲルスのいうところに従えば、先ずプロレタリアートとブルジョアジーの對立として、また生産の無政府性の激化としてあらわれる(エンゲルス「思想より科學」參照)。この兩者は一方の矛盾、對立の發展が他方の矛盾、對立を激化せしめるという意味で相互規定的なものであり統一されたものであるが、このあらわれが内在的矛盾―生産の無制限擴張の志向と労働者階級の限られたる消費との間の矛盾―ということが出來よう。(レーニン著「市場の理論」河野氏譯頁九八―九九參照)

さて、資本論第二卷第三篇の再生産論||實現理論が「内在的矛盾」を表示していることはレーニンの言を借りるまでもないが、問題は内在的矛盾がいかなる形で、いかなる程度で再生産論||實現理論にあらはれているかである。即ち資本論のこの篇に於いては單なる個別資本の再生産及び流通ではなく、社會的總資本のそれを扱つているという點で基本的矛盾も當然より展開された形であらわれねばならないが、ここではそのあらわれかたが問題になる。

再生産論||實現理論は「如何にして社會的資本の再生産と

流通とが起るか」を示したものであるが、この篇に關する限りそれは一應流通面（すなわち社會的總生産物の姿態變換という立場）からとらえられており直接的生産過程は單なる前提として背後におしやられてゐるということ、したがつて直接的生産過程にその基礎をもつ生産の無政府性（恐慌證明のためのより本質的な契機）はここでは直接顯現せず、ただ平滑な、均衡の取れた、全社會的資本の再生産と流通に於てさへも、生産の増大と制限された消費限界——富の蓄積と貧困の蓄積——勞資對立、という矛盾は不可避であるという事實を表現しているに過ぎない。かくて内在的矛盾の一方の極である生産の無制限擴大に對する志向が生産の無政府性に深い根據を有すれば有する程、ますます、再生産論——實現理論にあらはれてゐる限りでの内在的矛盾は一面的、抽象的とならざるを得ないであらう。レーニンも内在的矛盾は「資本論の他の箇所にも示され」（レーニン前掲書頁九九）てゐるといつてゐる。

以上のことは再生産論——實現理論がZ—の—と—という表現形式であらわれの—と—という資本の一般的公式という形式をとつて直接あらわれてゐないということと關聯せしめて考察されるべき、より明瞭になるであらう。

(二)C 内在的矛盾によつては恐慌は説明出來ない。

レーニンは恐慌を基本的矛盾からそして生産の無政府性から説明すべきであり、生産と勞働者階級の消費の矛盾をもつてし

てはならないと彼の浪漫派經濟學批判の中でいつてゐる。そしてこれ自身は完全に正しいとしても生産の無政府性、資本主義的な生産の無政府性自身は勞資の對立を前提とし、その發展とともに擴大してゆくことはすでに述べた通りである。兩者の論理的關聯はここではくわしく述べてゐられないが、富の蓄積と貧困の蓄積、資本の集中と勞働力の集中——勞働の社會化、工場内に於ける組織的生產と社會的分業の無組織性等々の矛盾の激化を通じて兩者は有機的な關聯をもつてゐる。したがつて勞働者が貧困化することによつて價值が實現出來なくなるからとか、或はそれによつて再生産の均衡條件が破壊されるから恐慌がおこるとかいうような馬鹿々々しい理論を除けば、大衆の貧困化窮乏化は今述べたような意味で窮極的には恐慌の原因となつてゐる。だからマルクスは「あらゆる現實の恐慌の窮極の原因は、依然としてつねに、大衆の窮乏と消費制限……である。」（資本論第二卷頁五二八）この意味に於いて生産と勞働者階級の消費の間の矛盾を單にそれのみ切りはなして把握することなく、生産の無政府性と勞資對立の統一的現象として、基本的矛盾から派生した矛盾として把握するならば、内在的矛盾が恐慌の説明から削除されるべきであるとする山本氏の見解には必しも同意しかねる。

しかしながら山本氏の恐慌と再生産論の關聯の不明確さ、迂遠さはむしろ氏が兩者の關聯を内在的矛盾にのみ求めようとし

たところにある。兩者の關係は生産の無政府性、生産の擾亂によつて惹起せしめられる一産業部門に於ける過剰生産が、再生産論に於いてこそはじめて、全社會の生産部門にまで擴大され一級の過剰生産恐慌にまで發展しうる可能性を獲得するということに求められるべきであらう。かくて再生産論にあらわれている限りでの内在的矛盾は、たとえかかる生産擾亂がないとしても、生産手段部門が消費資料部門を追いぬいて發展してゆくという事實、したがつて又勞資の對立も戟化してゆくという事實を表現することによつて、結局は生産の無政府性、生産の擾亂(再生産論に於いてはこのことは直接表現されていない)の可能性をも愈々擴大しているということを表現するものといえるのであつて、いわば恐慌の原因を裏から間接的に表現しているだけなのである。

(一)再生産論||實現理論が示す法則そのものからは恐慌の原因は説明出来ない。このこと自體は氏の『再生産論||實現理論は、社會的再生産の條件||法則を明らかにするものであり、したがつてこの法則が現實に『非實現』を通じて、いつさいの『動搖』『困難』を通じて實現される時、これらの『動搖』『困難』したがつてきた『恐慌』がいかなる原因によつて、いかにして、現實にあらわれるかということ、この法則そのものによつては説明されえない。『(〇九頁)』という論述をあげるまでもなく正しい。が問題はこの法則がつかぬかれることがいかなる意味をもつていられるかである。これについては先にもちよつとふれた様

にこの法則がつかぬかれること自體が内在的矛盾の擴大(限定された意味での)を意味しているということである。しかしわれわれは表式そのものからはこれ以上の意味をさぐる權利はなさそうである。蓋し「圖表そのものはそれ自體何ものをも示證することとは出来ない。圖表はただ過程の個々の要素が理論的に闡明される限り、過程を圖解し得るだけである。」(レーニン前掲書頁一〇五)からだ。因みに吉田義三氏を見よ。

以上甚だ雑な説明であるが、これは警評という性格の罪であるとして、明細なそれは今後に期待していただきたい。

追記 本稿はもと、鈴木重雄、吉田義三、吉田達次の四名によつてこの著書を中心にもたれた研究會での討論の結果を、著書の内容紹介を主にしてまとめたものである。執筆も夫々一部分づつ分擔したのであるが、最後

に吉村が責任をもつて加筆訂正を加へた。